

## 風刺画が語るもの、語らないもの

京都大学大学院文学研究科 教授 杉本淑彦

### 封建的特権の廃止を訴える

フランス革命勃発直後の1789年8月4日、国民議会在において「封建的特権の廃止」が宣言される。そのころに制作されたと推定されている右頁の版画二点は、特権廃止によって社会がどのように変わるかを、廃止推進派の立場から宣伝したものである。

上図では、岩石（対人・対物税Taille、税金Impôts、賦役Corvéesの三つが刻まれている）と、その上に乗る聖職者（法衣と祈祷書が記号）および貴族（軍装と腰の剣が記号）によって、平民（スコップと有輪犁が記号）が押しつぶされている。聖職者（第一身分）と貴族（第二身分）は、平民（第三身分）の犠牲のうえに、免税などの封建的特権に守られ安楽な生活を享受している、という構図が見てとれる。タイトル自体も、「昔は、もっとも有用な人びとが踏みにじられていた」といった具合である。

「今は、めいめいが重荷を負担することこそ望まれている」と題された下図では、各身分を体現している三人が、「土地税 Impôt Territorial」と刻字された岩石を支え、岩上には債権証書と金貨袋が描かれ、さらにその上に「国家負債」と書かれている。深刻な財政赤字の苦境にあるフランス国家を三身分が平等に支えよう、という主張である。

### 風刺画を理解するには知識が必要

以上のことは、どの解説書でも説明されていることである。ここでは、上図においてこれまで見過ごされてきた記号を三つ取りあげる。第一は、平民の右足先に転がる果実である。形状からして、洋ナシであることが見てとれる。ナシには、熟すと自然に落下する（収穫の手間を省いてくれると同時に実を損ないやすい）ことから、フランスでは「お人よし」で「だまされやすい人」という意味がある。この版画は、「聖職者は祈りで、貴族は剣で、平民は金銭でもって国王を守る」などという言葉にだまされて

きたお人よしの平民に反抗を呼びかける宣伝ビラであり、フランス革命を思想的に準備した啓蒙主義（目隠しされたような蒙昧状態にある人々の目を啓けば社会が良くなる、という考え方）の流れをくんでいる。

第二は、平民の左足先にある木株。葉の形状（丸く大きな鋸歯）からして、これはオーク（樅）だとわかる。フランスにおいてオークは、堅くて大木になるその形質からして、「正義」を表象するものである。今のフランス社会では正義が失われ平民が重税にあえいでいる、と言いたいわけである。

第三は、後景左に描かれている女性羊飼。フランスを含むヨーロッパ社会では、羊飼いの生活を牧歌的として理想視してきた伝統がある。この版画は、社会状況の過酷さを際立たせるために、それと対比できるように理想型を後景に配しているのである。

平等が実現した社会（下図）では、もはや羊飼いを描く必要もなく、洋ナシもない。正義が回復したことも、木株から勢いよく新芽が吹き出しているさまで表されている。

### 風刺画の功罪

1789年から国王処刑前年の1792年までに、約600種類の風刺画が制作され、行商人によってフランス全土に運ばれた。まさしく風刺画は、現代のスマートフォンのように、世論形成に大きな役割を果たした。だが、風刺画が伝える情報には、現代のSNSと同じように、誇張や隠蔽がかならずある。風刺とは、真実を露わにするために事実の一面を強調することである以上、歪曲は避けられない。そのことを理解したうえで、風刺画を見なければならぬ。

国民を三身分だけで表すこれらの版画は、当時の社会の重要な一面を見事に物語ってはいるが、三身分それぞれのなかの多様性まで表しきれてはいない。大貴族出身者が大部分の司教たちと、平民出身者が多い司祭以下の者たちとの対立。帯剣貴族と法服貴族との対立。そして、同じ平民ながらも、ブルジョワと、職人および小農民との間にも大きな対立があった。フランス革命は、この版画が制作されたのち、三つの身分だけでは割り切れない多様な社会層が、複雑に絡みあって展開されていくのである。



フランス革命前の税の負担を表した風刺画 写真：ユニフォトプレス



フランス革命後の税の負担を表した風刺画 写真：ユニフォトプレス